

東京学芸大学生物科同窓会ニュース

No.9
東京学芸大学生物科同窓会事務局
2009年9月30日発行

生物科同窓会には毎年40名近くの会員が新に加わっています。今期、会員数は2170名余りとなりましたが、この数は大学内に幾つかある学科別の同窓会の中ではベストスリーに入るものです。この大きなネットワークを活かすことができるよう、今回も新しい情報と懐かしい情報を交えて紙面を製作しました。なお、今回も東京学芸大学全国同窓会「辟雍会」とのタイアップでニュースをお届けしています。

◆平成21年度生物科同窓会総会

本年も生物科同窓会の総会を、10月31日(土)の大学企画によるホームカミングデーに開催します。当日は学園祭である「小金井祭」の期間中です。今年の講演会と総会は昨年同様、リニューアルした自然館の教室で行います。秋の一日、旧友を誘って、またご家族と一緒に、懐かしの母校へお越しください。20メートルを超す高さにまでに成長したケヤキの木が、皆さまをお出迎えいたします。

生物科同窓会「企画講演」のお知らせ

恒例の企画講演会を今年も同窓会総会に先立ち行います。本年の講演者はアカントアメーバなどヒトの健康と関わりのある微小生物の細胞学を研究されてこられた鶴原喬先生です。先生は平成12年に学芸大学を退官され、新潟県環境衛生研究所で所長をされた後、山梨県にある健康科学大学の教授として多忙な毎日が続けておられます。なお、本講演会は一般公開ですので、生物科同窓会会員以外の方でも自由にご覧頂けます。

平成21年度生物科同窓会総会

日時:平成21年10月31日(土)

13:00~13:50 講演: ウイルス感染症と
ダーウィン医学
講師: 鶴原 喬 先生

14:00~14:30 同窓会総会

14:35~16:00 世界一周・船で見た生物
講師: 青木 良氏(11期)

場所:東京学芸大学自然科学系研究棟(自然館)
2階 生物学第1実験室(CN206室)

【鶴原先生からのメッセージ】

ウイルスは宿主細胞に感染して、宿主細胞の核酸合成システム、タンパク質合成システムなどの一部

を借りるか乗っ取るかしてはじめて増殖でき、種々の疾病を引き起こします。ウイルスの起源は明らかにされていませんが、正常な細胞の遺伝子情報の切れ端が独立して寄生生活を始めたという可能性が高いといわれています。ウイルス感染の宿主特異性は、ウイルスの出自によるものと考えられ、ダーウィン医学(進化医学)の側面からも検討した話をいたします。

◆同窓会員からのお便り

昨年の生物科同窓会総会で開催した、石川依久子先生の講演には約10数名が来場し、学芸大におられた頃と変わらぬバイタリティー溢れる熱い話に耳を傾けていました。講演について、同窓生の杉山孝一さんに報告を寄せていただきました。

平成20年度東京学芸大学生物科同窓会 企画講演会 石川依久子先生『見えない世界がそこにある：超高速ビデオとタイムラプスビデオ』

平成20年11月1日の東京学芸大学ホームカミングデーの午後、懐かしい自然館にて、恩師である石川依久子先生の講演を拝聴いたしました。現在、石川先生は理化学研究所で、在職時と変わらず、いえ、私が拝見させていただいたところでは在職時よりも増して精力的に研究に取り組まれていらっしゃいました。



あのオワンクラゲの最先端研究で知られる理化学研究所では、1秒間に100万コマの画像を撮影できる超高速ビデオ顕微鏡が開発されました。しかし、理研にはその対象物となる生物が飼育されておらず、石川先生がその生物を提供したことから、理研での研究活動へとつながっていかれたそうです。

例えば、鞭毛の動きなどは、何億年も前から微細生物が行なっていることですが、その詳細を今まで理解することができませんでした。それは鞭毛の動きが速すぎるため、我々の脳では感知することができない世界だからです。また、逆にゆっくりと進行していく現象にも同様なことが言えます。そこで石川先生は、生物の速い営みを超高速ビデオで、また、ゆっくりと進行していく営みをタイムラプスビデオで記録し、時間とともに変化していく生命現象を捉えるべくご研究されていらっしゃいます。

はじめに、カサノリの配偶子の様子を超高速ビデオで見せていただきました。カサノリは石川先生が長年研究対象とされている藻類で、現在は絶滅危惧種に指定されています。カサノリが形成する傘の造形はたいへん美しいものです。そして、その傘から億単位の配偶子が海中に泳ぎ出します。しかし、その配偶子の鞭毛の動きを見ることは従来できなかったのです。今回、超高速ビデオで1秒を67秒に広げて撮影した映像をご紹介いただきました。そこから見えてきたものは、2本の鞭毛を器用に動かし前進・後退する配偶子の様子や、配偶子が接合する時の鞭毛の神秘的な動態でした。

カサノリの配偶子の接合は、2本ある鞭毛の1本を配偶子どうしが繋ぐことで開始されます。(同じ藻類のクラミドモナスでは2本とも繋がれるそうです。) 1本だけを繋ぎ、もう1本はフリーになっている配偶子は、実にダイナミックな動きを見せてくれました。配偶子の求愛ダンスとも言える動きです。また、ダイナミック故でしょうか、時にはその繋いだ手を放してしまうこともあるそうです。ミクロの世界にも、恋の駆け引きが存在するような気持ちにさせられました。カサノリは5億年前から存在する生物です。ですから、鞭毛の1本を繋ぐことから始まる接合は昔から行なわれていたはずです。雌雄同型の配偶子が見せる求愛ダンス、そのラストに完成する接合子は見事ハート型を形成します。太古から変わらぬ、恋の成就を連想させるハート型の接合子が印象的でした。

講演では、褐虫藻の不思議な旋回運動についても見せていただきました。褐虫藻はサンゴに共生しています。サンゴは褐虫藻が共生していないと生きていくことができません。近年サンゴの白化現象が問題となっていますが、これは、共生している褐虫藻が鞭毛によって泳ぎだし、サンゴからいなくなってしまうことによって起こるそうです。この褐虫藻は、時計回りに旋回し続ける不思議な運動をします。墨汁の中で観察すると、それが白い斑点として見え、およそ2日間ほど旋回運動を続けるそうです。なぜこのような運動を続けるのでしょうか。テリトリーを守る保身のためかもしれません。この不思議な旋

回運動は褐虫藻が持つ縦鞭毛と横鞭毛の2本の動きによってもたらされています。

石川先生は、現在この2本の鞭毛の動態の研究を進めていらっしゃるそうです。旋回運動の時、個体そのものは回転しないそうです。また、縦鞭毛と横鞭毛の動きを解析していても、その動きから個体の旋回運動がどう導き出されるのかがわからず謎となっているそうです。物理系の方に鞭毛の動きと個体の動きの関係について分析していただいているとのことでした。

タイムラプスビデオを用いた研究では、土壌中の藻類であるラン藻のホルミジウム動態について見せていただき、お話を伺うことができました。土壌中にホルミジウムを添加すると植物の生育が良くなるそうです。その時、ホルミジウムは根に集まってきます。しかし、根の表面に集合はしても、根粒菌のように根に侵入するようなことはなく、表層にだけ集まるようです。根に集まること、植物の生育が良くなることから、間違いなく何かをしているはずですが、まだ謎だそうです。

植物の根は呼吸をしています。もしかしたら、ホルミジウムにはCO₂センサーのようなものがあり、そこに集合するのかもしれない。また、ホルミジウムは光合成をし、植物の根は白く透明です。その根の内部が光ファイバーのような役割となり、ホルミジウムの光合成に必要な光を供給しているのかもしれない。しかし、それを確認するための微量な光合成を測定する方法が無くお悩みだそうです。

石川先生のお話はいつ伺っても、興味深く引き込まれるものばかりです。会に集まった同窓生は皆、その魅力的な石川ワールドに引き込まれ、充実した時を過ごすことができました。

石川先生が学芸大にいらしたのは、私が大学1年生の時でした。正直なところ当時は藻類に興味を持つこともなく、遺伝子の研究がしたいと考えていました。しかし、石川先生のお話を伺い、その石川ワールドの虜となり、迷わず石川研に入ることを決めたことを思い出しました。



そのパワーは現在も変わらず魅力的で、当日集合した石川研の同窓生は、会終了後石川先生と夕食を

共にしながら、気がつけばホルミジウムの模型を紙粘土で作り、ああでもないこうでもない研究室時代に戻ったように楽しい時間を過ごしていました。

『生物は三次元の世界で生活しているが、それだけではなく、「時間」という4つめの軸を交えて捉えることが不可欠であり、そこに生物の生き様を見て、考え、追求していくことが大切である』。石川先生の

教えは、現在、中高生を前にして教壇に立つ私の、今も変わらない生物との向き合い方の根幹となっています。

石川先生、そしてこのような会を企画して下さいました皆様に、この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。ありがとうございました。

杉山孝一(40期・平成4年学部卒・9年院修了)

◆特別寄稿

大学におけるこれまでの私

犀川政稔

この度(2009年)私は定年退職いたしました。最終講義に来てくださった方々には心からお礼申し上げます。五寶匡郎君がその時の様子をインターネットに載せてくださいました。来てくださらなかった方々はそれをご覧ください。

私は文京区大塚にあった東京教育大学(現筑波大学)に学部、修士、博士と続けて在学し、東京学芸大学生物学科には1972年にまいりました。身分は文部教官助手です。卒論以来の研究は「葉緑体の微細構造」で、教育大学植物学第二講座の林孝三先生、植田利喜造先生、そして遠山益先生のお世話になりました。学芸大学には教育大学のものと同じJEM7型電子顕微鏡があり、私は学生時代の研究を続けることができました。しかし、助手は自分の興味で進める研究のほかに学生を教育することが仕事です。週2回の1学年対象の生物学実験と週1回の3学年対象の形態学実験が私の担当でした。多種多様な学生たちがしょっちゅう研究室を訪れました。荻沼一男君のように私とただ一緒に過ごそうという人々もおりましたが、久我敏文君のようにめずらしい植物を見せにくる学生がたくさんおりました。学芸大学では植物系の川崎次男先生と動物系の北野日出男先生が野外生物研究学会を運営し、会報「FIELDS」を発行していたので、植物や昆虫に詳しい学生たちが競って野外に出掛けていたのです。その当時今自然科学棟1号館と呼ばれる建物の北側の中庭には隅々まで採集した無数の植物が植えこまれ、その一角は昆虫のための食草園となっていました。マイナーな雑草や灌木までもが1種ずつ鉢植えとなっていたり、シダ類は大事にされ、数坪もあるビニールハウスに入っていたりしました。川崎先生は講義の名人でした。高梨賢英さんからお借りした録音テープで先生の植物系統学概論を聞いて驚きました。教室の全員が先生の、あのダミ声でハッタリの効いた話に心酔し、独特な雰囲気満喫しているのです。私もいつかそのようになりたいと思い、私の目標となりました。しかし、それは無理。私が先生から習得したの

は飲酒術だけでした。この術は忍術や算術と違い、からだにアルコールをしみ込ませるだけなので簡単でした。先生は間もなく44歳の若さで亡くなられてしまいました。所属の学生たちは仕方なくほかの研究室に移ったのです。私のところに移籍してランニングを教えてくれた長尾憲樹君はその一人です。先生直伝の飲酒術は私の研究を方向転換する仲介役を果たしてくれました。「犀川は飲みっぷりがいい」、という理由で母校植物学第一講座菌類研究室の三浦宏一郎先生から「十二例会」の通知が届くようになったのです。その会で、先生から菌類の微細構造を研究したらどうか、という話がありました。私の菌類研究のきっかけを作ってくれたのは1年生の渡辺とも子さんと鈴木三枝子さんのお二人でした。彼らがかびのパラフィン切片を観察したい、というので私が三浦研究室を訪問し、子囊菌 *Gerasinospora retispora* (= *G. reticulispora*) をいただいたのが最初です。その際、徳増征二君が技術的な指導をしてくださいました。

目的とする菌がうまく培養できた時、その菌の観察中に思わぬ発見をした時、その発見のデータによって論文原稿が完成した時、原稿が雑誌に受理された時、その都度私はつい「やったあ」と叫んでしまいます。外国雑誌からの受理通知を初めて受けたときは叫ぶだけではなく、道に迷って小金井の質屋坂を二度も自転車で登ってしまいました。それは1981年のある日のことで、雑誌は最近 *Botany* と改称された *Canadian Journal of Botany* でした。その頃から10年間は犀川研究室の黄金時代です。戸塚順子さんと森川千春君との共著のほか、穴沢隆志君や佐藤大樹君や青木勇治君との共著などがカナダばかりでなく、イギリスやアメリカやドイツの雑誌に次々と掲載されました。

私がカナダに10か月滞在したのは1989年のことです。出発は成田、到着はトロントで長時間の搭乗でしたが、出発も到着も同じ2月27日の17時でした。人類はあるスピードで飛行機に乗っていれば時間を止めたり、場合によっては過去にさかのぼったりできるのではないのでしょうか。雪に閉ざされた春の遅いカナダに中田尚子さんから研究室の便りが届き、開封すると手紙と一緒にさくら吹雪が出てきたこと、夏、安藤雄一郎君と牧井創君が訪れてくれ、

左ハンドルの危ない運転に肝を冷やしたことが思い出されます。カナダでの一番の収穫はキューバ人の Rafael F. Castañeda Ruíz さんと知り合ったことです。ウオータールー大学の研究室に持ち込んだ彼のポストンバッグにはキューバの湿って腐った黒い葉だけが小分けもされず、充満していたのです。「これはキューバと同じだ」と私がつぶやいたとき、バッグをとり囲んだ人々がニヤッと表情をくずしました。私は彼のすさまじい仕事ぶりが気に入りました。

私は 2000 年からの 4 年間附属世田谷中学校の校長を勤めました。引き受けるときには、まさか学校が一難去ってまた一難の社会であることを知りませんでした。理科の岡田仁先生と宮内卓也先生、それにお隣の小学校の藤田留三丸君にはたいへんお世話になりました。そのころ日本の大学が法人化し、大学が会社になるとともに、文部教官は教員になり、書類作成が教員の主な仕事になりました。2006 年の 6 月以来私自身も好調から不調に転じ、無理のきかない体になりました。しかし、幸い学生の作る卒論だけは順調でした。今はそれを磨いて投稿原稿を作ることが仕事です。この度ようやく廣谷江里さんの卒論が私との共著でアメリカの *Mycologia* に掲載されることになりました。*Mycologia* へは東京大学の田辺雄彦君が私を共著者にしてくれましたが、その 1 つを除くと私は自分自身で書いた論文を今まで 8 報その雑誌に載せました。超スローペースとなりましたが少なくともあと 2 報はそこへ載せ、2 桁にした

いと思います。茂木寛子さんや増村友紀さん、それに佐藤哲也君の卒論は力作でした。原稿さえできれば受理されるものと思います。中村佳代子さんの修論も何とかしなければなりません。



ところで私は特任教員の身分で来年の 3 月まで、まだ大学に研究室を持っています。井上勤先生もいらしてくださいましたし、つい先日は黄金時代の大橋和浩君、星野淳君と新井克樹君の 3 名（写真；左から）がやってきて昔話に花を咲かせました。みなさんもぜひ気軽にお越しください。

2009 年 8 月 26 日

マツムシソウが咲く八ヶ岳演習林にて

◆生物科紙面同窓会

さまざまな時代に、さまざまな同窓生が生まれ、さまざまな人生を歩んでいます。近況、回想、思いなど・・・生物科同窓生の「今」の声をお届けします。

【2期】

● 28 年間、小学校に勤務しました。現在は、小流派の家元として、伝統文化「いけ花」の次世代担い手を育てるべく、日々、老骨に鞭打ちながら励んでいます。竹早の校舎で、一台ずつ貸与された顕微鏡を持ち出しては、植物のプレパラートをのぞき込んでいた時代が、なつかしく思い起こされます。（T.H.：昭和 29 年卒）

● 同窓会のますますの発展を期待しております。（K.Y.：昭和 29 年卒）

● 学芸大を卒業してから 55 年がたち、来年春には 80 歳になります。現職中から都研の尾瀬の現地研修をはじめ、各地の野外観察会で若い先生方の研修のお手伝いなどをして参りました。このところ加齢のた

め大分体力は衰えてきましたが、おかげさまで元気にしております。首都大の牧野標本館に週 2 回通い、標本の整理、検討と地方に出かけて標本を採集する仕事もいつの間にか 10 年になりました（A.Y.：昭和 29 年卒）

【10期】

● 最近各地で地震があり、我が家の地震対策をあらためて見直しているところです。去る五月には久しぶりに同期 13 組の有志 7 名が新宿で集いました。卒業以来はじめて顔をみせてくれた方も一人いて、昔の学大生活の思い出（小金井公園での集い、サレジオ学園での植物観察、研究室でも生活・・・）、これからの老後について、話はつきませんでした。毎月一度は海外に旅する方もいて、皆、まだまだ元気なこうと、また次の会を楽しみに別れました。（Y.S.：昭和 37 年卒）

【14期】

● 大学院修了後 7 年間は生化学の研究を続けましたが、主人の転勤と娘の出産で研究を断念しました。しかしながら、研究者だった主人について出来るだ

け国際会議には出席し、外国の研究機関を訪問しました。この30年間いろいろな変化がありましたが、最近日本の若者を外国で見かけることが少なくなりました。勇気を持って世界に羽ばたいて下さい。(Y.F. : 昭和41年卒、43年院修了)

【18期】

●同級生の皆様にも、学芸大学にもご無沙汰しています。相変わらず武蔵境にある獣医大学に勤めていますが、還暦も過ぎ、残り少なくなってきました。昨年獣医寄生虫学の教科書を2冊出し、今は衛生動物学の教科書を作っています。これが出れば30年間の獣医寄生虫学教育のまとめが終わるのではないかと思います。あとは自分の研究のまとめをしたいと思っていますが、雑用の多さに四苦八苦しています。(S.I. : 昭和45年卒)

●同窓生の皆様、お元気でお過ごしですか？私は定年退職後2年目に入りましたが、“天下り”もせずのんびり自然環境保全活動で日々過ごしております。最近つくづく思うのですが、政治がかわっても文化が変わらないと、袋小路から抜け出せないのではないのでしょうか。将来を悲観的に思わずにはいられない今日この頃です。(T.K. : 昭和45年卒)

●小学校の教員を定年退職してから2年目になります。現職中は全教科を教えつつも大学で理科・科学を学んだことが心の支え・自信につながって今と思ひ増す。今は、家族や家事に関する仕事に費やす時間がとても多くなりました。健康第一でこれからは楽しみます。(M.T. : 昭和45年卒)

●ご無沙汰しております。都を定年退職して2年目になります。昨年に引き続き科学技術振興機構(JST)で、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)の仕事をしております。高校生の研究会発表等に参加する機会が多いのですが、理科好き、とりわけ生物大好きな生徒がかなりいることに勇気づけられています。(T.Y. : 昭和45年卒)

【22期】

●同窓とはありがたいものです。10月30日に全小理東京大会を本校、日野第四小学校で開催いたします。その講師として、大先輩の日本のフェアブルとして有名な、ぐんま昆虫の森園長矢島稔先生をお迎えすることができました。ぜひお出かけ下さい。新しい理科教育元年として、新教材を扱った授業を公開します。理科の苦手な先生方もとり組める発表内容です。お待ちしております。都小理ホームページをご覧ください。(Y.O. : 昭和49年卒)

【26期】

●珪藻の多様性を追い求め、研究を続けてきましたが、近年はその結果を教育へ転換する必要性を強く感じ、教材やカリキュラムの開発も行っています。ウェブ上で使える SimRiver(シムリバー) という名前のシミュレーションソフトもその一つ。生徒が河川流域の環境を自由に作り、その河川の環境を珪藻から理解するものです。ホームページで検索し、授業等で使っていただければ幸いです。ご相談も大歓迎です。(S.M. : 昭和53年卒)

【30期】

●勤務校の生徒が学芸大へ多数合格し、希望を抱いて進学していつてくれています。卒業生としても教師としても嬉しい限りです。受験生から目標としてもらえる大学としてあり続けるためには、大学の先生方の実践的指導は欠かせませんが、我々卒業生の現場での働き活躍もまた重要です。こんなことを考える歳になりました。(S.S. : 昭和57年卒)

【34期】

●公立高校の定時制に勤務していると教科指導よりも生徒指導に力を入れなければなりません。特に最近、常識を疑うような保護者が増えてきました。給食費を含む学校徴収金を1年以上滞納しているのに居直ったり、問題行動に対する学校の指導に難癖をつけた挙げ句、教育委員会に抗議したり・・・子どもだけでなく、親を教育しないと学校(ひいては社会)が益々混乱していくのでは、と危惧しています。(K.S. : 昭和61年卒)

●卒業、就職の後は、田舎で特に大きな出来事もなく、毎日を送っています。残り定年まで15年となり、楽しみにしております。大学の3、4年では山ほどコオロギを飼い、飼育室に泊まりながら、朝は再履、再々履の英語に通っていましたが(でもお酒はしっかり飲んでいました)。退職後は、また少しドラマチック？な人生。そして、同窓会で少しアカデミックな人生かな？(E.N. : 昭和61年卒)

【42期】

●皆さんお元気ですか？私はお陰さまで元気です。何のお手伝いもできませんが、生物科同窓会のますますの発展を祈念申し上げます。(Y.O. : 平成6年卒)

●皆さま、お元気ですか。毎日バタバタと過ぎていきますが「とりあえず生きてる！カンシャ！！」を胸に、日々暮らしています(M.K. : 平成6年卒)

【50期】

●昼夜開講制で2000年から大学院で学ばせていただきました。現在も当時と同じく日本獣医生命科学大学比較細胞生物学教室に勤務しております。夜間も丁寧にご指導いただき、狩野先生はじめ生物科の先生方にはとても感謝しております。教員免許更新制が始まり、先生方の仕事がさらに増えているのではないかと心配しております。(H.H.:平成14年院卒)

●20年くらい前から、コアジサシの生態調査と保護活動を行っています。現在はコアジサシの教材化をすすめたいと考えていますが、歳とともに教科指導に当てられる時間が確保しづらくなっているのが悩みです。(M.H.:平成14年院卒)

◆追悼文

本年2月に小林興先生が逝去されました。小林先生は長らく東京学芸大学の農学教室の教官として、その職に就かれておられましたが、大学改組により物質生命科学科、そして、生命科学分野へと所属を変更されました。本号では物質生命科学時代より苦楽をともにされた原田和雄先生に追悼文を綴って頂きました。

故小林興先生を偲んで

原田和雄 東京学芸大学 広域自然科学系講座
生命科学分野

東京学芸大学名誉教授・元帝京平成大学教授 小林興(こばやし こう)先生は、2009年(平成21年)2月16日、膵臓がんのためご逝去されました。

小林先生は、1939年(昭和14年)10月1日、長野県にお生まれになりました。1958年(昭和33年)に長野県立丸子実業高等学校を卒業された後、東京教育大学農学部で卒業研究を西川五郎先生の作物学研究室で行ないました。1965年(昭和40年)、東京教育大学を卒業後、大学院農学研究科農学専攻修士課程でも引続き西川先生の研究室に所属し、1967年(昭和42年)に修了されました。その後、東京大学大学院理学研究科関連理化学専攻博士課程において、八巻敏雄先生の研究室で植物ホルモンの一つであるオーキシンのついて研究を行い、1972年(昭和47年)に修了されました。そして、順天堂大学医学部の講師を1年ほど勤められた後に、1973年(昭和48年)に東京学芸大学の講師に着任され、2003年のご定年まで、30年間の永きにわたり東京学芸大学に在職し、教育と研究に取り組まれました。その間、1979年(昭和54年)から1980年(昭和55年)まで、スイスのフリブル大学、およびドイツのベルリン自由大学に留学されました。また、1982年(昭和57年)にはフランス・パリ大学第7(自然科学)に研究招聘されました。東京学芸大学を退官されてからは、帝京平成大学に就任されるとともに、国際生物学オリンピック日本委員会 運営委員会 副委員長を勤められました。



小林先生のご専門は植物生理学であり、主に植物ホルモンについて研究されました。

研究対象は、八巻研究室に在籍されていた時に始めたオーキシンの一つであるインドール酢酸のは

たらきについての研究に始まり、ベルリン自由大学のReinert教授(植物培養細胞における不定胚形成で知られている)の研究室で学んだ研究をさらに発展させてサイトカイニンの研究を行ないました。また、東京学芸大学では、ハネモを用いた細胞の再構成に関する研究をはじめとして多くの大変興味深い研究成果を残されました。一方、教育に関しては、環境教育、及び理科教育に心血を注ぎ、理科教育において、中・高校生、及び理科教員対象のDNA教育を主催されていました。理科教育に関する啓蒙活動は退職後も精力的に続けられ、特に国際生物学オリンピック(IBO: International Biology Olympiad)への日本の参加に奔走され、2005年に日本の高校生が初めて参加するに到りました。また、IBOの推薦図書である「キャンベル生物学」の翻訳を監修され、2007年に出版されています。

私が小林先生に初めてお会いしたのは、私が東京学芸大学に着任した1997年でした。当時、物質生命科学科は小林先生と私の2人の教員だけの小さな学科であり、旧4部の流れを汲むことから、研究室は自然館ではなく、現在の環境教育施設(旧「農場」)の近くに位置していました(現在もそうです)。長い外国生活から帰国したばかりで、大学の様子がわからない私に対して、小林先生はとても親切にしてくださり、その暖かい人柄に心打たれました。その後も家族ぐるみのお付き合いをさせて頂きました。小林先生は、いつも大きな夢を抱き、その実現に日々ご努力されていました。目標を達成するための熱意

と努力を目の当たりにする度に、勇気づけられ、励まされました。国際生物学オリンピック日本委員会の立ち上げに際しては、様々な困難があったようですが、小林先生のビジョンとリーダーシップあってこそ実現できたことです。

本年は、生物学オリンピックが初めて日本で開催

◆キャンパス内自然観察会

本年6月28日(日)の午後、学芸大学構内で岡崎恵視先生(13期)と橋本健一先生(19期)を講師として生物科同窓会、生命科学分野共催の自然観察会を行いました。参加者に学芸大の学生がいなかったのは寂しい限りでした。それでも、市民の方々15名(小, 高校生, 同窓生教員を含む)、同窓生(教員)1名、学生3名(院生1名、青山学院大生2名)幹事関係者7名の合計26名が参加しました。観察会の感想を市民の方2名に綴っていただきました。

虫と植物と学芸大のメタセコイアと

東京学芸大学内で行なわれた「自然観察会」に参加しました。今にも雨が降りそうな天候でしたが、傘を持たずにスタートを切ることが出来ました。

小金井に居を構えて15年にもなるというのに、学芸大学の構内をこのように歩くのは初めてのことで、その広さに驚きました。

岡崎恵視先生が時おり立ち止まりながら、ていねいに植物の話をして下さいました。ウマノスズクサ、ヒマラヤスギ、アオギリ…中でも参加者が長く立ち止まって興味を惹かれたのは、タラヨウという木の葉っぱでした。光沢のあるその厚めの葉の裏に、爪の先で傷をつけるように字を書いたらしくすると、文字がはっきりときれいに浮き上がってきました。

「はがきの木」とも呼ばれ、切手を貼って郵送できる事を教えてもらうやいなや、葉っぱを採取していく(取っていく?)人が続出しました(笑)。

橋本健一先生は大きな採集用の網を片手に持ち、早々にジャコウアゲハを捕獲。子どもたちに取り囲まれながらも、その匂いや雄雌の見分け方などを詳しく説明して下さいました。かと思うと、いつの間にか他の昆虫を追って違う世界?に…。おかわりにならないなあ、先生は…。というのも私事で恐縮ですが、橋本先生は今から二十数年前、私が都立新宿高校の生徒だった時に生物を教えて下さった恩師にあたります。明らかに文系人間だった私が大学で理科の勉強をしたいと思ったのは、先生の教えて下さった美しく不思議な生物の世界に魅せられてしまったからでした。今でも黒板に色とりどりのチョークで先生が描いて下さった「ポリペプチド」の図をふ

され、初めて日本の高校生が金メダルを獲得し、記念すべき年になりました。このことを最も喜んでおられるのは、小林先生でしょう。これから、尚一層、日本の生物学教育の発展にご尽力下さる矢先の早すぎるお別れとなってしまいました。今は悲しみに耐え、先生のご冥福をお祈りするばかりです。

と思い出すことがあります。自然観察会のこの日は、小学生や、高校で農業を学んでいる学生さんなど十代の参加者も多く見られました。一番多感なこの時期に、植物や昆虫や多くの生物に直接、触れたり、専門の先生方にお話を伺うということは、その不思議な世界の入口への何よりの近道になるでしょう。

途中から降り出した雨の中で仰ぎ見たメタセコイアの木は、匂い立つように神秘的で、この日、一番心に残った樹木でした。

一緒に参加してくれた小金井在住の仲間たちからも「来年もぜひ参加したい」との多くの声を聞くことが出来ました。来年もまた、花や虫が好きな子どもたちを大勢誘って必ず参加したいです。

北島理恵子(小金井市本町)

グリーン・アドベンチャーに参加して

グリーン・アドベンチャー(キャンパス内自然観察会)に参加しました。この頃、自然の中を歩く機会が多く、植物のことを勉強したいと思っていたので、私にとってはとてもタイムリーな企画でした。

学内には田畑もあり、とにかく広いのに驚きました。スタートと同時に、昆虫専門の先生がジャコウアゲハを見つけ、子どもたちは大喜び。ジャコウの匂いがするとかしないとかワイワイガヤガヤ。子ども達は、それから先生のあとに付いてまわっていました。

観察樹木は50本。それぞれの樹木の前に、Q&Aパネルが設置されています。「この樹木の名は?」というパネルをめくると、名前と樹木についての説明が書かれています。

この日は、雨が激しくなったため、途中で解散となりましたが、それでも25種類くらいの樹木を見ることができました。イヌツゲ(犬黄楊)は、ツゲとは全く別種だそうで、だから名前に“イヌ”と付いている(犬が聞いたら、気を悪くしそう~)。エゴノキは、実の皮にエゴサポニンが含まれていて、石けんの代用になるとか、また、すりつ



ぶして、川で魚を採るときにも使う。青桐の種子はコーヒーの代用になる…。タラヨウは葉っぱがハガキの替わりになる！（写真参照） う～ん、将来、役にたつかも～。

恐竜が銀杏を食べていた。花粉や種子を遠くに飛ばす工夫など、大昔から進化を重ね、現代まで生き延びてきた植物たち。そんな話を聞きながらの観察会は大変面白く、これからは植物を見る目が少し変わりそうです。

上のほうに繁っている葉っぱを懸命に取ってくれたり（写真参照）、雨にも負けず資料をみせてくださったり、熱心に説明して下さった先生方、ありが

とうございました。来年も楽しみにしています！（来年はもっと多くの人に参加してもらいたいです）

甲田真理子（小金井市桜町）



◆大学での出来事

平成 20 年に、スクールリーダー養成を目的とした教職大学院が立ち上がりましたが、学部においても、平成 22 年度から教育学部の再編が計画されています。教養系の定員が減り、その分教育系の定員が増えます。A類には新たに、「国際教育選修」、「日本語教育選修」、「情報教育選修」、「ものづくり教育選修」が新設されました。B類の定員も増となりましたが、中でも理科専攻は約倍に増えました。従来、理科で行われていた推薦入試がなくなったことも、大きな変更点です。F類の環境教育、自然環境科学、文化財科学の課程・専攻に変更はありませんが、定員はいずれも削減されます。

岡崎恵視先生が昨年退職された後、理科教育分野の教員の枠が空いていましたが、本年 4 月に生命科学分野から中西史先生が移籍しました。これに伴い、生命科学分野には Ferjani Ali（フェルジャニ・アリ）先生が赴任されました。Ferjani 先生のご専門は植物生理学・分子発生遺伝学です。

旧「自然館」（現在は自然科学系研究棟 1 号館と呼んでいます）の第 3 期耐震補強工事が終了し、それまで一時避難していた、吉野研、狩野研、高森研が移転し、これで生命系の引っ越しが完了しました。原田研究室及び原研究室は、旧技術科棟（現在は人文社会科学系・自然科学系研究棟 3 号館と呼んでいます）で変わりありません。

10 月からは、正面玄関、事務室、中庭、物・化・数の研究室を含む第 4 期工事が着工します。来年 3 月に、終了予定です。従って、来春には新しく生まれ変わった自然館をご覧いただけます。この機会にぜひ一度、母校を訪れてはいかがでしょうか。

◆卒業論文発表会・修士論文審査会（公開）のお知らせ

平成 21 年度の卒業論文発表会は 2010 年 2 月 6 日（土）、7 日（日）を予定しています。後輩の研究成果を是非ご覧になってください。また、2 月には修士論文審査会を行います。公開審査ですので、発表はどなたでも見ることができます。卒業論文発表会、および修士論文審査会の日程を含めた詳細は、来年 1 月に生物科同窓会のホームページでお知らせいたします。

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~biology/seibutsuka/dosokai.htm>

◆会費納入等のごお願い

平成 21 年度～ 24 年度の会費を集めています。未納の方は郵便振替にて 2500 円をご送金ください。

口座番号：00170-1-21830

加入者名：学芸大生物科同窓会

なお住所変更の際には、下記までご一報ください。

電話/FAX 042-329-7521（庶務：吉野）

E-mail:mayama@u-gakugei.ac.jp（会計：真山）

今回の紙面同窓会では、平成 24 年度までの会費を納めていただいた 2, 6, 10, 14, 18, 22, 26, 30, 34, 38, 42, 46, 50, 54 期の皆さまに原稿依頼のはがきを送りました。来年は 3, 7, 11, 15, 19, 23, 27, 31, 35, 39, 43, 47, 51, 55 期の皆さまに原稿を依頼する予定です。たくさんのお声をお待ちしております。

◆編集後記

今回の編集時期が真山先生の海外出張と重なったため、急遽、私と岡崎先生(13 期)が応援することになった。とはいえ、ほとんど真山先生によって、いつもの「ニュース」様式に大部分の原稿が割付されていて、手伝えたのは入稿締切間際の数稿と調整、初稿の校正でした。ともかく、このニュースが完成できたことでほっとしている。(11 期 青木 良)